ディボーションノート　３７

|  |
| --- |
| ９月２１日(月曜)　 ヨブ記　第２５章  第３回目の議論で、ビルダデが短く、しかし、鋭くヨブを批難します。「うじのような人、虫のような人の子はなおさらである。」ヨブに対して、お前は神の前に虫けらのような人間であり、うじのようなお前が正しいはずがない。だから、お前の祈りに神はお答えにならない、と。ビルダデにとっては、神は絶対的超越者で、大権と恐れとは神と共にあり、神は高き所で平和を施される方だと断言します。実際の神は、深い愛と憐れみに満ちておられる方であり、神の愛は主イエス・キリストによって、示されました。ローマ書５章にこうあります。「わたしたちがまだ弱かったころ、キリストは、時いたって、不信心な者たちのために死んで下さったのである。正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。しかし、まだ**罪人であった時**、わたしたちのために**キリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示された**のである。」５章６-８節。 |
| ９月２２日(火曜)　 ヨブ記　第２６章  　ヨブはビルダデに答えます。冒頭の２-３節は、皮肉をこめての言葉です。「長々と忠告をありがとう。あなたは弱っている私を、どれほど助け、救い、教えてくれたことか。本当にありがとう。」と皮肉をこめて言います。実際に何の役にも立っていない、意味のない助言であり、むしろ月並みな因果応報のご立派な言葉はどこから出てきたのか、と聞き返したいほどなのです。６節から述べるヨブの信仰は、旧約聖書にも見当たらないほどのものです。ヨブは、神の偉大さをこう告白します。「神は、陰府と呼ばれる死後の世界も、滅びの穴も、そこに集まる亡霊も、すべて支配されておられる。」12節の「ラハブ」は、驕り高ぶった海の怪物を現し、敵対するエジプトをさしています。「主のかいなよ、さめよ、さめよ、力を着よ。さめて、いにしえの日、昔の代にあったようになれ。ラハブを切り殺し、龍を刺し貫いたのは、あなたではなかったか。」イザヤ51章9節。 神の業は測り知れないものです。 |
| ９月２３日(水曜) 　ヨブ記　第２７章  　5-6節で「わたしは断じて、あなたがたを正しいとは認めない。わたしは死ぬまで、潔白を主張してやめない。 わたしは堅くわが義を保って捨てない。わたしは今まで一日も心に責められた事がない。」とヨブは主張します。友人の責めたてる言葉が、「私は断じて潔白だ。」と強く言わせているように思えます。2-6節に12回も「わたし」「わが」が用いられています。そしてこう叫びます。「神よ、私の敵は悪人となり、不義なる者となり、滅ぼされるように。」 |
| ９月２４日(木曜)　 ヨブ記　第２８章  　神の知恵を歌う讃歌が挿入されます。38章から始まる神の言葉の前奏曲のようだと言われます。金銀宝石などの鉱物は地中深くあろうとも、その場所を人間は突き止めることができる。しかしそれに対して、神の「知恵はどこに見いだされるか。悟りのある所はどこか。 人はそこに至る道を知らない、また生ける者の地でそれを獲ることができない。淵は言う、『それはわたしのうちにない』と。また海は言う、『わたしのもとにない』と。精金もこれと換えることはできない。」のです。神の知恵は突き止められない。ヨブは神を畏れて礼拝を守り、誠実に生きてきました。しかし、理由が分からない苦難を与えられ、友人たちは因果応報を繰り返しますが、罪が思い当たらない。これほどの苦難を受ける理由が分からないのです。最後に「見よ、主を恐れることは知恵である、悪を離れることは悟りである」とあります。ヨブはできる限り主を畏れ、悪を離れてきたのです。どうして苦難が義人に起こるのかは、神の方からの「啓示」で初めて理解できるのです。ヨブ記の最後が神の啓示で終り、それを聞いたヨブが、42章で悔い改めます。神はご自身を隠されるお方であり、またご自身を明らかに示され啓示されるお方です。主イエス・キリストこそ神であり、地上に来られた啓示です。また神の言葉である聖書こそ主イエスを証する啓示の言葉です。 |
| ９月２５日(金曜) 　ヨブ記　第２９章  　ここからはヨブの独り言、独白です。「ああ過ぎた年月のようであったらよいのだが、神がわたしを守ってくださった日のようであったらよいのだが。 あの時には、彼の灯がわたしの頭の上に輝き、彼の光によってわたしは暗やみを歩んだ。」過去の幸福。一家は栄え、公平な裁きで尊敬を集めていました。「あの時」「あの時」と繰り返します。ここに記されているように、ヨブは人々から尊敬され、指導者としても公平な立場で導いていたことが分かります。晩秋に蒔いた麦は、先の雨で発芽します。冬を越して、後の雨(春の雨)によって実が結びます。春の雨は待望の雨です。「彼らは雨を待つように、わたしを待ち望み、**春の雨**を仰ぐように口を開いて仰いだ。彼らが希望を失った時にも、わたしは彼らにむかってほほえんだ。彼らはわたしの顔の光を除くことができなかった。」事実、ヨブは多くの人々から慕われていたのです。 |
| ９月２６日(土曜)　 ヨブ記　第３０章  　「しかし今は、わたしよりも年若い者が、かえってわたしをあざ笑う。」あれど尊敬を集めていたヨブなのに、苦難に苦しみ、全てを失うと、野良犬の群れが放浪するように、追放される。人々はあざ笑い、神はなお沈黙されている。「わたしは苦しい日を送る者のために泣かなかったか。わたしの魂は貧しい人のために悲しまなかったか。」ヨブは自分ではそうしてきたと訴えます。「しかしわたしが幸を望んだのに災が来た。光を待ち望んだのにやみが来た。**わたしのはらわたは沸きかえって、静まらない。**悩みの日がわたしに近づいた。」激しい独り言です。この言葉にも、それでも神を求める思いがあふれています。十字架の上で、「わが神、わが神、どうして」と主イエス・キリストは祈られました。同様に、ヨブも祈っているように聞こえます。どんな失望や落胆、絶望の中にあっても、神への祈りがある。それは、「わが神、わが神、どうして」と祈る祈りであり、主イエス・キリストに結ばれて、だれであっても、どこであっても、どん底に置かれても祈れる祈りとして与えられている。 |